

# 高専地理教育におけるフィールドワークの活用に向けた試論

— 東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス周辺における土地利用の変遷を題材に —

## An attempt to implement fieldwork in geography education at Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology: Focusing on land use changes around the Shinagawa campus

朝倉 慎人<sup>1)</sup>

Makito Asakura<sup>1)</sup>

要旨：本稿では、東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパスの地理教育におけるフィールドワークの有意義かつ現実的な活用のあり方を検討し、実現の可能性を探る。具体的には、地理学習に対するハードルを下げ、地理的な見方・考え方の醸成に寄与し、かつ1単位時間での実施が可能となるようなフィールドワークを構想し、その試行的実践をへて、次年度以降の本実施に向けて成果と課題を検討した。試行では、身近な地域の姿を示す土地利用の痕跡を手掛かりに、実地において地理的事象と自然環境・人文環境の関係を考察させた。本校における教育的効果の詳細な検討は今後の課題となるが、地理教育におけるフィールドワークの活用は、学習面の費用対効果に照らして有意義な取組みだと考えられる。

キーワード：地理教育，フィールドワーク，土地利用，東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス

### 1. はじめに

フィールドワークとは、観察、計測、アンケート調査、聞き取り調査など、必要な情報を集めるために野外で行われる調査活動一般のことである[1][2]。地理教育におけるフィールドワークの活用をめぐることは、座学とは異なる様々な教育的意義が認められており[3][4][5]、高等専門学校の低学年と同年代の生徒を扱う高等学校の学習指導要領においても一貫して重視されてきた[5][6]。特に2018年告示の現行の学習指導要領においては、新設・必履修化された地理総合の中項目の1つに「生活圏の調査と地域の展望」が設定され<sup>1)</sup>、フィールドワークを通じた生活圏の課題の把握と解決策の探求が求められるようになっている。

こうした背景もあって、地理教育をめぐることは、これまでもフィールドワークの教育的意義が繰り返し指摘されてきた。それにもかかわらず、実際の教育現場、とりわけ高等学校におけるフィールドワークの実施率は、授業時間の不足や実施に至るまでの各種調整といった実施環境の問題ゆえに、きわめて低い水準にある[5][6][7]。この実施環境の問題は、筆者が担当する東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス（以下、本校）の1年次必修科目・地理歴史

I（地理）におけるフィールドワークの活用のあり方を検討するうえで、折り合いをつけるべき重要な課題である。

以上をふまえて、本稿では、教育的効果を向上させるための手法としてフィールドワークを位置づけ、本校の地理教育におけるフィールドワークの有意義かつ現実的な活用のあり方を検討し、実現の可能性を探ることを目的とする。なお、本稿はフィールドワークの学習面に関する検討を試みたものである。フィールドワークの実施にあたっての環境整備や調整事項に関する検討は、齋藤・吉田（2022）などを参照されたい[8]。フィールドワークには様々な教育的意義があるとされ、フィールドワークと総称される活動も多岐にわたる。そこで第2章では、この点を簡潔に整理したうえで、本校の実情をふまえて地理歴史Iの年間カリキュラムの中にフィールドワークを位置づけ、本稿で扱うフィールドワークの目的を明確化する。そのうえで具体的なフィールドワークの内容を構想し、第3章では、筆者が顧問を務める同好会の活動の一環として実施した試行的実践をまとめる。そして第4章では、この試行的実践の成果と課題をふまえて、次年度以降の地理歴史Iの授業におけるフィールドワークの活用の可能性を検討した。最後に第5章で本稿の成果と限界にふれる。

1) 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科，一般科目

## 2. 見学型フィールドワークの構想

### (1) フィールドワークの種類と教育的意義

フィールドワークと総称される活動は多岐にわたるが、生徒・学生のコンピテンシー（領域を超えて機能する汎用性の高い資質・能力）や学習プロセスの観点に注目すると、見学型フィールドワーク、作業型フィールドワーク、探求型フィールドワークの3つに区分することができる[9]。このうち見学型フィールドワークでは、教員や専門家による解説を手掛かりに諸事象を認識する作業が中心となるのに対して、探求型フィールドワークでは、生徒・学生自らが課題を設定し、実証的な研究を行うことが想定される。両者の間に位置づけられる作業型フィールドワークでは、教員が課題と視点を提示し、それを受けて生徒・学生が地理的な作業に取り組むことになる。

こうした活動には、座学とは異なる様々な教育的意義が見出されてきた。池（2022）によれば、それは①生徒・学生の興味・関心の喚起、②知識やスキルの習得、③学習方法の習得、④他者と交流する機会の提供の4点に集約される[2]。例えば、フィールドワークを実施することで、生徒・学生の学習に対するハードルが下がるとともに、身近な地域において新たな発見をする体験を通じて学習意欲の向上が期待できる（①の観点）。教室で学んだ内容を現地で直接観察する経験は、学習内容をより深く理解することや他地域の事象を理解する際の基準としても役立つ（②の観点）。また、フィールドワークの対象となるミクロな地域においては、事象どうしの相互関連性の確認が容易であり、地理教育において重要な技能とされる地域的特色をつかむ方法を習得しやすいと考えられる（③の観点）。

以上のように、フィールドワークに期待される教育的効果は多岐にわたるが、それを最大化するためには、生徒・学生の地理的能力の発達段階をふまえて適切な類型を選択し、そのうえでフィールドワークの内容を教室での学習内容と明確に関連づけることが必要となる。

### (2) フィールドワークの位置づけとねらい

本校の地理歴史Ⅰ（地理）の教科教育においてフィールドワークを活用するにあたって、まず検討しなければならないのが、どのような地理教育上の目標を念頭に置いて方法論としてのフィールドワークを採用するかという点である。この点について本稿では、地理学習で重視される「社会的事象の地理的な見方・考え方」の育成を念頭に置いたうえで、本校1年次のカリキュラムの実情や低学年の学生の実態をふまえて、本校周辺の少数の社会的事象の観察を中心とした見学型フィールドワークを実施することとした。

まず、地理的な見方・考え方について整理しておきたい。地理的な見方・考え方は、本校の低学年と同年代の生徒を扱う高等学校の必修科目・地理総合の学びにおいて中核的な地位を占める要素である[10]。地理総合で育成すべき資質・能力（コンピテンシー）は、①知識や技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等の育成の

3項目に整理されるが、なかでも②に含まれる「思考力」が中核的な要素となる。この思考のプロセスこそが地理的な見方・考え方である。この地理的な見方・考え方は、①位置や分布、②場所、③人間と自然環境との相互依存関係、④空間的相互依存作用、⑤地域の5つの要素で整理される[10]。言い換えれば、地理的な見方とは、「どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか、という観点から、諸事象を位置や空間的な広がりとの関わりで捉えること」であり、地理的な考え方とは、「なぜそこでそのようにみられるのか、なぜそのように分布したり移り変わったりするのかについて、環境条件や他地域との結びつき、人間の営みとの関係などに着目し、地域という枠組みの中で捉えること」である[11]。

学習面では、以上の地理的な見方・考え方の育成を念頭に置いて、具体的なフィールドワークを構想することになるが、現実にフィールドワークの大枠を決めるのは環境面の問題である。前章でふれたように、高等学校におけるフィールドワークの実施率はきわめて低い水準にあるが、その原因として池（2022）は、①入試対策などによる授業時間の不足や校務の多忙化といった時間的制約に関する問題、②校外に生徒を引率するための手続きの問題、③高等学校の地理が選択科目であったことに起因する問題の3点を指摘する[6]。今井（2023）によれば、このうち①の時間的制約に関する問題の克服が、地理学習にフィールドワークを導入するうえできわめて重要である[7]。実際、本校の地理歴史Ⅰにおいても、前後期で計4回の定期試験を行う関係で、多くの授業時間をフィールドワークに割り当てることには慎重にならざるをえない。この問題の打開策として、松岡（2012）は「1単位時間程度で、学校周辺を、少数の事象に絞って行う」ワンポイント巡検を提起した[12]。ワンポイント巡検は1単位時間程度で実施する地理教育巡検であるため、時間割を変更する必要がなく、年間の授業時数を圧迫する懸念も小さい。こうした取組みであれば実施上のハードルが低くなり、本校の地理歴史Ⅰの授業におけるフィールドワーク実施の可能性も高まる<sup>②</sup>。

本校1年次のカリキュラムの実情をふまえれば、時間的な制約が緩やかな見学型のワンポイント巡検を選択するのがより現実的である。本校の1単位時間は90分であるが、今井（2023）を参考にすると、フィールドワークの全行程は概ね1,800mから2,700m程度に収める必要がある[7]<sup>③</sup>。本実践では、本校を中心とする半径1,000m～1,500m程度の円の中で見学型フィールドワークを構想することとした。

以上に加えて考慮に入りたいのが、本校の学生の実情である。本校は技術者を養成する理系の高等教育機関であり、中学校在学時点で既に社会科に対する忌避感を抱く学生も存在する。前節でその一部を紹介したように、フィールドワークには地理学習に対する意識を前向きなものに変えるいくつかの効果が期待されてきた。こうしたフィールドワークの教育的意義のいくつかは、社会科全般を暗記教科とみなし、根強い苦手意識を持つ学生の教科指導においてこそ重要であろう。また、既に述べたように、本校における

地理教育は主として1年次に実施されており、高専における社会科教育の入口としても機能している。したがって、地理に対する意識を改善することができれば、高専社会科教育全体にとっても良い影響が見込まれる。そうであるならば、本稿で紹介するフィールドワークの実践は、1年次のできる限り早い段階で実施することが望ましい。

以上より、本稿では、単なる暗記作業を越えて地理的知識と地域を有機的につなげ、学習のハードルを下げる効果的な手法としてフィールドワークを位置づけたうえで、本校の所在地の事情を考慮した実施可能なフィールドワークを考案し、試行的な実践をへて、次年度以降の本格実施に向けて成果と課題を検討する。

### (3) フィールドワークの概要

本稿で紹介する実践では、学生にとって身近な地域のみられる社会的事象の観察・認識を足掛かりに、人間と自然環境との相互依存関係や他地域との結びつきに注目して地域の成り立ちや変容を捉える視座を涵養することを目的とし、その道具立てとしてフィールドワークを活用する。具体的な実践の紹介に先立ち、本節では、地理的な見方・考え方の涵養との関係に留意してフィールドワークの概要を提示したい。本実践のポイントは、①身近な地域の諸事象を位置や空間的な広がりについて注意して観察し、②①の背景を、自然環境や人文環境、他地域との結びつきに注目して考察

することである。なお、①が地理的な見方、②が地理的な考え方に相当する。

本フィールドワークの舞台となる地域は、本校が位置する東京都品川区東大井1丁目と隣接する同4丁目である(図1)。本校の所在地を含む東大井1丁目の大部分は、昭和初期に竣工した埋立地であり、それ以前は遠浅の海底であった[13]。西方の陸地に目を転じると、遠浅の海に面して細長い海岸平野が形成され、海食崖を越えると、現在の大井町方面に向かって台地が広がっていた[13]。江戸時代にはこの細長い海岸平野に東海道が整備され、現在の京急本線北品川駅付近から青物横丁駅付近にかけての道沿いには東海道最初の宿駅として品川宿が置かれた。そして、品川宿の南北の隣地には、海岸に沿って御菜肴八ヶ浦<sup>4)</sup>として知られる漁業集落が成立した[13]。一方、狭小な海岸平野に迫る西部の台地上には大名の下屋敷が置かれ、大名の隠居地としての役割も担った[14]。時代が下り大正期になると、都市化の進展を背景に、品川宿とその隣地の地先で埋立地造成が活発化する[15]。まず昭和初期にかけて現在の東大井の大部分と東品川が、昭和20年代には勝島が、昭和30年代には八潮がそれぞれ埋め立てによって誕生した(図1)。一方で、御菜肴八ヶ浦の伝統をもつ大井御林獅師町(大井御林浦、現在の鮫洲駅付近)の漁業は衰退し、1962(昭和37)年12月に終焉を迎える[16]。こうした江戸・東京郊外の沿岸部という地理的立地に由来する土地利

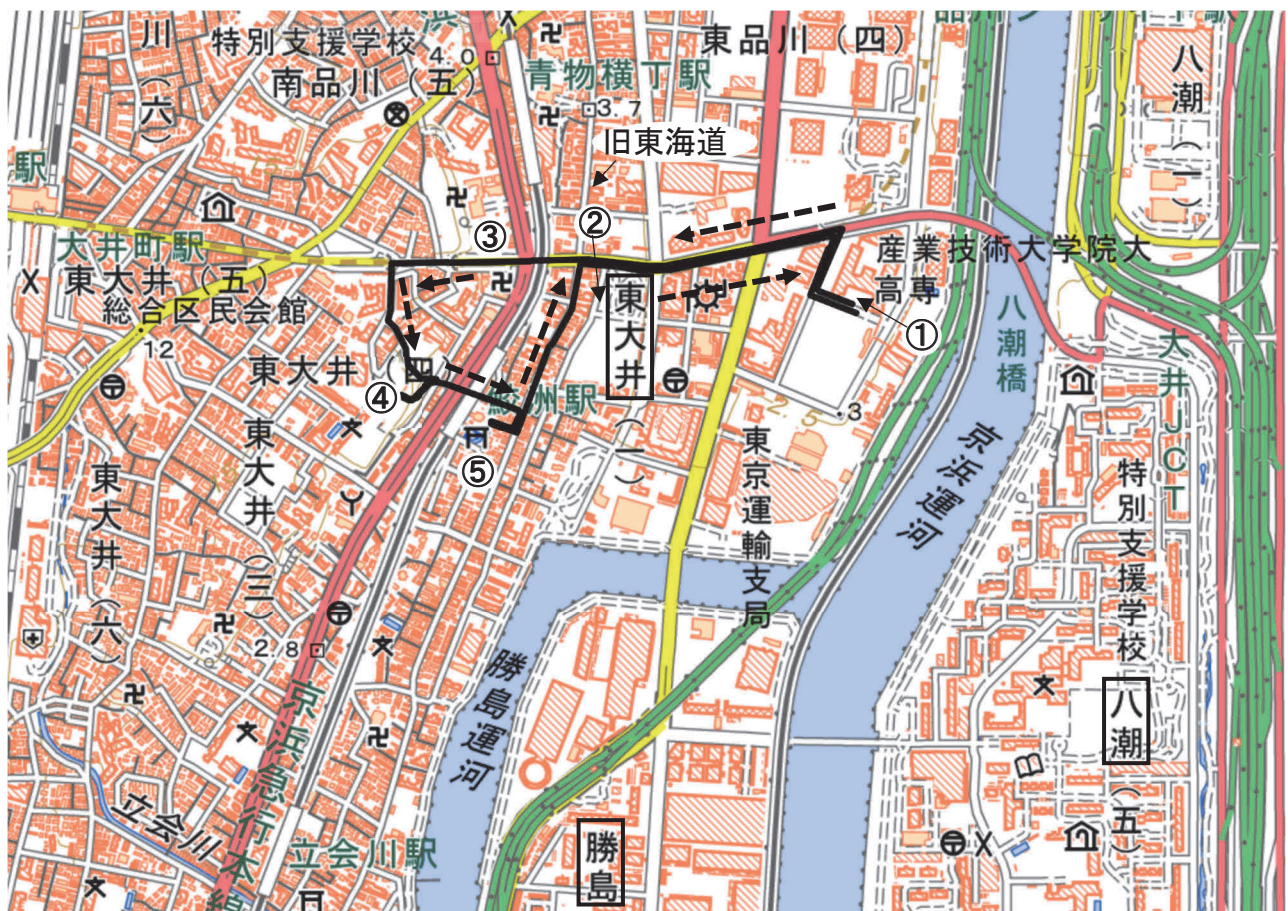


図1 フィールドワークのルートマップ

図中の太線はフィールドワークのルートを示す。また、図中の①～⑤は本文中の①～⑤と対応する。

(地理院地図に加筆)

用のあり方と人々のいとなみは、東大井や北隣の南品川などに共通する特徴である。

本実践で行う基本的な作業は、上記のような地域の特徴を、地理的な見方・考え方を活用して識別することである。そのためには、①かつての地理的環境を想像し、②ミクロな地域スケールと③より広域な地域スケールを念頭に置きながら、土地利用のあり方と自然環境・人文環境の関係を考察することが求められる。そこで本実践では、①新旧地形図の比較によって地域の過去の姿を理解させうえて、②地域の過去の姿や変化のあり方を理解する助けとなる痕跡を見学し、③現地での解説を通じて、学生に当該の痕跡をより広い文脈に位置づけて考察するよう促すことにした。

以上の大方針のもと、学生が学習内容を身近な地域の具体的な事物を通じて確認し、地理的な見方・考え方の理解に至る助けとなるような全長 2,500m 程度のルートを設定した。詳細なフィールドワークの試行的実践の内容は次章で紹介する。なお、地理歴史 I の授業における実際のフィールドワークは、「地図と GIS」と「地形と生活文化」の学習を終えた、第 1 学年前期中間試験前（5 月半ば頃）に実施することを想定している。

### 3. 見学型フィールドワークの試行

#### (1) 事前準備

本章では、前章で整理した問題意識にもとづいて試験的に実施した、見学型フィールドワークの実践例を紹介する。本実践では、学生にとって身近な地域でみられる社会的現象の観察・認識を足掛かりに、人間と自然環境との相互依存関係に注目して地域の成り立ちや変容を捉える視座を涵養することを目的とし、その道具立てとしてフィールドワークを活用した。なお、本章で紹介する見学型フィールドワークは、2023 年 11 月 3 日に、筆者が顧問を務める同好会（地形文化会）の活動の一環として実施した。当日の参加者は 3 年生 3 名と 2 年生 1 名である。本フィールドワークの所要時間は、次年度以降の地理歴史 I における実施を想定して、本校の 1 単位時間に相当する 90 分に設定した。

本実践は、年度初めに「地図と GIS」と「地形と生活文化」を学習した後、前期中間試験前に実施することを想定している。フィールドワークでは、特に地形図の読図および小地形と土地利用の関係の理解が求められることになる。試行の際は、出発前にこうした点を大まかに確認したが、実際の授業ではフィールドワークの実施直前の授業の最後に、テスト勉強を兼ねて復習しておくように促しておけばよいだろう。また、本実践では、学生にとって身近な地域の事例として旧東海道品川宿および大井御林獵師町（大井御林浦、現在の鮫洲）周辺の土地利用の変遷を取り上げるが、地理的近接性という点では身近であっても、実態としては学生にとって身近な地域とは言い難い。そのため、場合によっては、フィールドワークの各チェックポイントにおいて、次に訪問する場所に関する事前知識を仕込んでおく必要がある。なお、本実践では、当地の現在の地理的環

境を確認し、かつての地理的環境を想像する道具として、明治 14 年測量の 2 万分の 1 迅速測図「東京府武蔵国荏原郡品川宿」（複製）、今昔マップ on the web、地理院地図を利用する。このうちフィールドワークのルートを含む地理院地図と迅速測図は人数分印刷して当日の出発前に配布し、今昔マップ on the web は各自のスマートフォンで適宜閲覧するよう指示した。

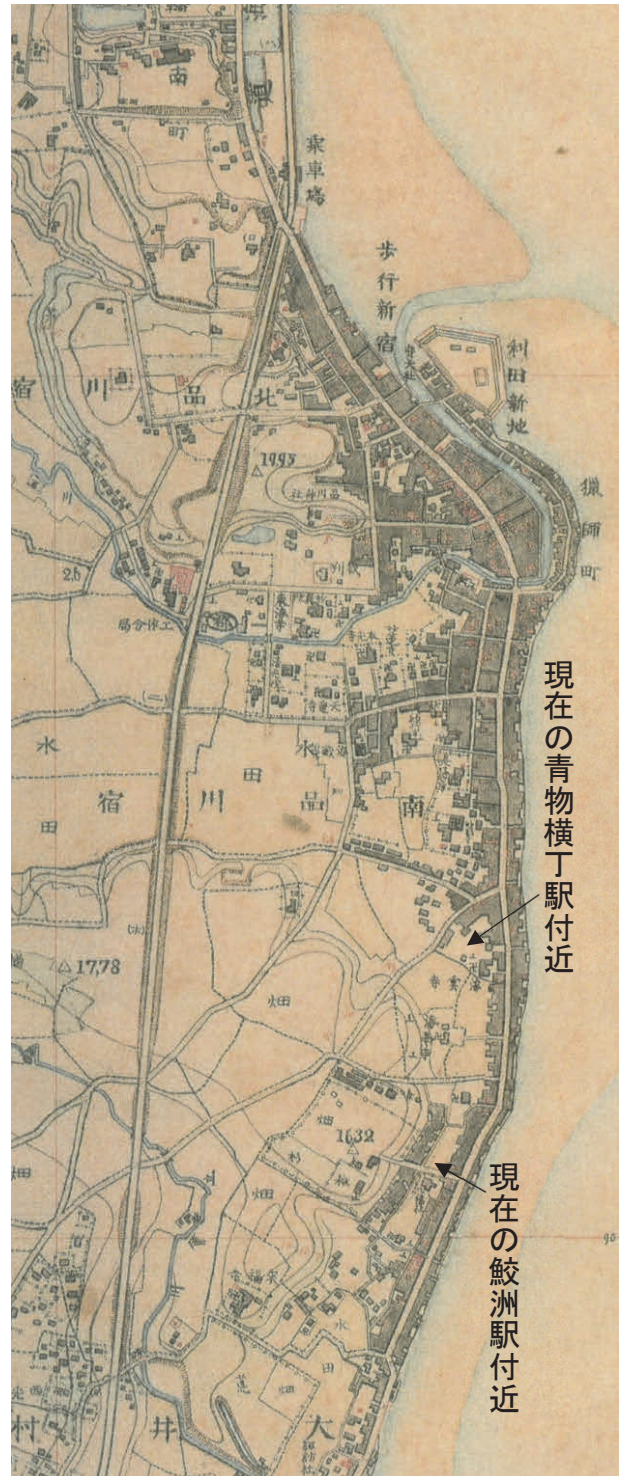


図 2 現在の品川キャンパス周辺の迅速測図  
現在の品川キャンパスは、図東部の海中である。  
(迅速測図に加筆)

## (2) 導入

本フィールドワークのスタート地点は、本校の中央階段下に設定した(図1中の①)。出発前にこの場所でフィールドワーク参加にあたっての安全面の注意事項を確認するとともに、本時のテーマとねらいを学生と共有した。前章で確認したように、本フィールドワークのテーマは、本校周辺の地域の特徴に関わる事物を实地で観察し、地域という枠組みを念頭に置いて、自然環境・人文環境と土地利用および人々のいとなみとの関係を理解することである。ただし、こうした中核的なテーマについては各チェックポイントにおいて念入りに説明することとし、この時点では具体的な見学場所とルートの全容に関する説明に止めておく。本フィールドワークにおける見学場所は、旧東海道、旧仙台坂、大井公園(仙台藩下屋敷跡)、鮫洲八幡神社、鮫洲運動公園(漁業権放棄直前の漁船係留場所)である。ルート全長はおよそ2,500m、移動時間の合計は40分程度、各見学場所における解説および観察時間は5分から10分程度である。これらの情報をルートマップ(図1)を示しながら学生に伝達する。なお、本フィールドワークの舞台は、物理的な距離という意味では身近であっても、第1学年の5月という時期を考えると、多くの学生にとって土地勘が無い地域であろう。加えて、地形図に苦手意識を持つ学生も少なからず存在する。そのため、漫然と集団に付いて歩く学生が出る可能性がある。この点に関して、フィールドワークの試行時は参加学生による教え合いが有効であったことから、実際の授業の際も2~3人1組のグループで協力し合うよう指示するとよいと思われる。

ルートマップ(地理院地図)を示した後、明治14年測図の2万分の1迅速測図「東京府武蔵国荏原郡品川宿」(以下、迅速測図)(図2)を配布し、明治前期と現在の地表面の様子を比較するよう促した。新旧2枚の地形図を突き合わせることで、本校周辺の地理的環境の著しい変化を実感することができる。なお、明治14年の段階では本校の所在地は海中であるため、迅速測図における本校の位置の特定は難しい。実際、試行の際も迅速測図と地理院地図を照らし合わせる作業に若干の時間を要した。そこで、実際の授業では、迅速測図と地理院地図に共通して確認できるランドマーク、具体的には寺社を探すように指示するとよいと思われる。これらの寺社を目印にすれば、比較的容易に京急本線の青物横丁駅や鮫洲駅の位置を比定することができる。これらを手掛かりにすれば、対照作業は比較的容易になる。

## (3) 展開

本校を出発して最初に向かうのは鮫洲運動公園(図1中の②)である。この公園付近から、京急本線の高架の手前を南北に通過する旧東海道にかけて緩やかな坂がみられる(図3)。この坂は漫然と歩いていても気づかない可能性があるため、試行の際も通過前に観察事項として共有した。ここで迅速測図を見ると、かつては旧東海道の東側の家屋のすぐ裏手まで海岸線が迫っていたことがわかる(図2)。



図3 旧東海道に至る  
緩やかな坂(筆者撮影)

図4 旧仙台坂  
(筆者撮影)



図5 仙台藩および鯖江藩下屋敷跡付近からの眺望  
写真奥に京急本線の鮫洲駅が見える。(筆者撮影)

これらの家屋は北品川から続く品川宿とそれに続く家並みである。公園の入口で一度立ち止まり、以上の情報を全体で共有したうえで、この坂を通過する際に改めて迅速測図の海岸線がどこにあたるのかを各自で確認させた。

鮫洲運動公園出発後、京急本線の高架と国道15号線を越えると目の前に旧仙台坂が現れる(図1中の③)(図4)。ここで再び立ち止まり、歩いてきた方向、すなわち京急本線の高架方面を見ると、道路が旧東海道の先で大きく下がっていることを確認できる。この下り坂から旧仙台坂に至る狭い平坦地が海岸平野である。旧東海道はこの狭小な平野を、海に沿って通過していたことになる。

旧仙台坂を上り、左手に折れてしばらく行くと、大井公園が見えてくる(図1中の④)。この付近にはかつて仙台藩伊達家と越前国鯖江藩間部家の下屋敷があった[14]。下屋敷は、大名の別邸や隠居地などとして利用された場所である。現在の品川区域、なかでも目黒川左岸の高台から御殿山にかけて(現在のJR山手線の日黒駅から大崎駅付近にかけて)の場所には、江戸からほど近く、眺望が良好な台地を求めて、多くの大名が好んで下屋敷を設けた[14]。当時眼下に海が広がっていたこの場所も、元々は伊達忠宗が1658年に麻布の下屋敷を返上して拝領したものであった[14]。すなわち、この地に下屋敷が存在したという事実もまた、江戸近郊の台地上という地理的立地と深く関わっていると考えることができる。試行時は、迅速測図と照らし合わせながら、④の場所から現在の眺望を確認するとともに、当時の眺望を想像するように指示した(図5)。

眺望を確認した後、前半の小まとめを行った。かつての

東海道は狭小な海岸平野をすり抜けて品川宿に入り、仙台藩下屋敷は台地上にあって海を見下ろす場所にあった。いずれも地形の特徴を背景とした土地利用であり、特に後者は江戸近郊という地理的立地を重要な背景とした。こうした土地利用と自然環境・人文環境の緩やかな関係性を確認するなかで、局所的な事物の観察から地域の特徴の考察へと展開する道筋を示し、そうした視座の共有を図った。

次の目的地は、鮫洲駅南東に位置する鮫洲八幡神社である(図1中の⑤)(図6)。鮫洲駅付近には、大井御林獅師町(大井御林浦)とよばれた漁村があり、かつては漁業や海苔養殖が盛んに行われていた[13]。鮫洲八幡神社はこの集落の氏神である。南品川宿獅師町(品川浦)で江戸時代に始まった海苔養殖は、徐々に南方の大井、大森、羽田方面まで広がり、19世紀初頭までには海苔の一大産地が成立した[13]。しかし、明治期以降、都心に近く、割安でまとまった土地があった目黒川沿いを中心に工業化が進展し[17]、大正期以降は東京湾における埋立地造成が活発化した[15]。その結果、漁業は衰退の一途をたどり、1962(昭和37)年12月の漁業権放棄を以てこの地の漁業は終焉を迎えた[16]。神社を見学した後、東海道に沿って北上し、再び鮫洲運動公園を訪れるが(図7)、この場所はかつての水域で、南方の勝島運河とともに漁船係留場所として利用されていた[16]。このように、神社と公園はいずれもこの地域の漁業の痕跡を示すものであるとともに、東京近郊の工業化の歴史をひも解く端緒となるものでもある。これらの見学を通して、近現代の土地利用の展開と生業の変化を想像するよう促した。

#### (4) まとめ

フィールドワークのゴールは、スタート地点と同じく本校の中央階段下である。最後にここでまとめを行うとともに、若干の補足説明を行った。本フィールドワークのねら



図6 鮫洲八幡神社 (筆者撮影)



図7 鮫洲運動公園 (筆者撮影)

いは、身近な地域の諸事象を、地理的な位置に注目して観察し、自然環境・人文環境に注目して考察することであり、そうした考察を束ねて地域の特徴を大まかに把握することであった。個別の事物と自然環境・人文環境との関係性についてはその都度説明してきたが、それぞれの考察が独立し、有機的に結びつかない事態も想定される。そこで最後に、一連の観察事項を、江戸・東京の近郊という当地の地理的特性と絡めて概括的に説明するとともに、改めて事象の背後に潜む他地域と共通する文脈の存在へ注意を促した。

なお、本フィールドワークでは本校の所在地および西部の内陸方面に関する考察を行ったが、八潮パークタウンなど、東部の大井埠頭を考察対象に加えると、埋立地造成をめぐる意味づけの変化を議論することもできる。この点については本実践では扱わなかったが、「居住・都市問題」の単元を扱う際の伏線になるため、場合によっては言及しておいてもよいかもしれない。

#### 4. 高専地理教育におけるフィールドワークの活用に向けて

これまでの議論をふまえて、本章では、本校の地理歴史Iにおける実際の運用を念頭に、試行的に実施したフィールドワークの成果と課題を検討する。

本実践のねらいは、大きく①学生の興味・関心の喚起、②知識やスキルの習得、③学習方法の習得に大別できる。試行の参加学生らは、起伏の変化と土地利用の関係や都市化と土地利用の変遷に対して比較的高い関心を示した。また、学生どうして率先して新旧地形図の対比作業を行ったり、移動中や観察中に活発な意見交換を行ったりするなど、①については総じて良好な結果が得られた。ただし、前述したように、この試行は街歩きを活動内容とする同好会の活動の一環として実施したため、そもそも参加学生の地理的事象に対する関心は高く、参加者のサンプルにきわめて大きな偏りがある。実際の授業実践の対象は40人程度であり、そこには地理学習に対して苦手意識を持つ学生が多く含まれると考えられる。既往研究では、フィールドワークによって学習者の学習に対するハードルが下がり、学習意欲が向上するという成果が指摘されており、本校においてもある程度の効果は期待できると推察されるが<sup>5)</sup>、その効果を少しでも高めるためには、年間の授業計画全体を通じて、座学における学習内容と地域社会や国際社会で生じている諸現象を意識的に連絡し、かつ学生が学習内容を社会の中で実感できるような授業実践上の工夫が求められる。

一方で、②と③については、試行の結果に明瞭な成果を見出すことはできなかった。ただし、「社会的事象をめぐる地理的な見方・考え方」が抽象的でわかりにくい資質・能力であることをふまれば、身近な地域の具体的な事例を用いてそれを実地で体感する経験は、学生の理解度を向上させる大きな助けになると考えられる。そうであるならば、本稿において90分という時間的制約のなかで地理的な見方・考え方の醸成に資するフィールドワークを構想し、試

行したことに一定の意義があると言えよう。

最後に、本校の地理歴史Ⅰの授業にフィールドワークを導入するうえでの注意点も指摘しておきたい。本稿では、フィールドワークによる地理的な見方・考え方の醸成を目指したが、これはフィールドワークの実践のみによって可能となるわけではない。その教育的効果を高めるためにも、本実践を地理歴史Ⅰの年間カリキュラムの中に明確に位置づけ、教室における通常の授業内容と有機的に結びつけることが実践面での課題となる。フィールドワークは通常の座学と比べても、準備や運営に多くの時間と労力を割く必要があり、担当教員の負担が大きくなる。また、やり方によっては、授業時間を使った単なる街歩きや散漫な学習活動になってしまうおそれもある。したがって、明確な学習上の目的を掲げ、あくまで目的に対する有効な手段の一つとしてフィールドワークを位置づけることがきわめて重要である。

## 5. おわりに

本稿では、東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパスの地理教育におけるフィールドワークの有意義かつ現実的な活用のあり方を検討し、試行的実践をふまえて、実現の可能性を探ってきた。フィールドワークをめぐっては様々な教育的意義が認められているが、本校の実情をふまえて、本稿では、地理学習の初期において学習に対する心理的ハードルを下げることで、身近な地域の事象を直接観察するなかで教室での学習内容をより深く理解すること、ミクロな地域の具体的な事象を通して地理的な見方・考え方を醸成することなどを念頭に置いて、1単位時間90分で実施可能な見学型フィールドワークを構想した。そのうえで、試行的実践を行い、当該のフィールドワークの計画の実現可能性と教育的効果を検証した。本試行の結果をふまえるならば、次年度以降の地理歴史Ⅰの授業でフィールドワークを活用することは、少なくとも学習面の費用対効果という側面からみれば、十分有意義なものと思われる。

ところで本稿では、①学生の興味・関心の喚起、②知識やスキルの習得、③学習方法の習得といったフィールドワークの教育的意義に着目して[2]、教員主導型の見学型フィールドワークを実施し、その成果と課題を検討した。しかし、第2章であげた教育的意義のうち、④他者と交流する機会の提供、すなわち社会的スキルの育成や地域社会の一員としての意識を育てるシティズンシップ教育の観点からフィールドワークを意義づけるのであれば[2]、より主体的・能動的な関与が要求される作業型フィールドワークや探求型フィールドワークの実施を検討する必要がある。本稿では地理学習の入口としてフィールドワークを意義づけたが、今後、技術者を育成する理系の高等教育機関における地理教育のあり方を検討すれば、地理教育のなかで育成すべき資質・能力と関連して、より相応しいフィールドワークの活用法が見えてくるだろう。この点は今後の課題としたい。

## 参考文献

- [1] 佐藤 郁哉：『フィールドワーク 増訂版——書を持って街へ出よう』, pp. 32-35 (「野外調査——民族誌的フィールドワークの位置づけ」), 新曜社, 2006
- [2] 池 俊介：「フィールドワークの意義」, 池 俊介編：『地理教育フィールドワーク 実践論』, pp. 1-6, 学文社, 2022
- [3] 秋本 弘章：「野外観察と調査」, 村山 祐司編：『21世紀の地理——新しい地理教育』, pp. 117-122, 朝倉書店, 2003
- [4] 犬井 正：「野外調査のあり方と課題」, 中村 和郎ほか編：『地理教育講座 第Ⅱ巻 地理教育の方法』, pp. 319-330, 古今書院, 2009
- [5] 池 俊介：地理教育における地域調査の現状と課題, E-journal GEO, 7-1, pp. 35-42, 2012
- [6] 池 俊介：「フィールドワークの現状と課題」, 池 俊介編：『地理教育フィールドワーク 実践論』, pp. 7-13, 学文社, 2022
- [7] 今井 英文：『ウォークラリー巡検——生徒主体の巡検学習』, pp. 1-15 (「巡検学習とウォークラリー巡検」), 古今書院, 2023
- [8] 齋藤 亮次・吉田 裕幸：「フィールドワークの準備と実施」, 池 俊介編：『地理教育フィールドワーク 実践論』, pp. 25-47, 学文社, 2022
- [9] 山本 隆太, 「フィールドワークの類型」, 池 俊介編：『地理教育フィールドワーク 実践論』, pp. 13-18, 学文社, 2022
- [10] 井田 仁康：「地理的な見方・考え方——地理的な見方・考え方に着目した学習」, 井田 仁康編：『高校社会「地理総合」の授業を創る』, pp. 14-19, 明治図書, 2021
- [11] 滝沢 由美子：「大学の教員養成科目における授業実践に向けて」, 碓井 照子編：『「地理総合」ではじまる地理教育——持続可能な社会づくりをめざして』, pp. 111-120, 古今書院, 2018
- [12] 松岡 路秀：「巡検等の学習の基礎的考察とワンポイント巡検の提唱」, 松岡 路秀ほか編：『巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践——地理教育におけるワンポイント巡検のすすめ』, pp. 2-8, 古今書院, 2012
- [13] 品川区：『品川区史 上巻』, pp. 7-49 (「地形および地質のなりたち」), pp. 828-858 (「近世品川の漁業」), pp. 858-880 (「近世品川の手荒れ養殖業」), 1973
- [14] 寺門 雄一：「しながわの大名屋敷」, 品川区：『品川区史 2014——歴史と未来をつなぐまち しながわ』, pp. 50-54, 2014
- [15] 品川区立品川歴史館：『広がる品川臨海部——新地開発から八潮地域の誕生まで』, pp. 40 (「品川町や東京府による埋立地造成」), 2020
- [16] 寺門 雄一：「大井の海」, 品川区：『品川区史 2014—

[17] 坂本 道夫：「工業地帯の形成」, 品川区：『品川区史

- ① 地理総合は、①地図や地理情報システム (GIS) の活用, ②国際理解と国際協力, ③持続可能な地域づくりの3つの大項目で構成され、「生活圏の調査と地域の展望」は「自然環境と防災」とともに③の直下に設定されている。
- ② なお、本校の第1学年の1クラスあたりの在籍学生数は概ね40人程度であり、実際の授業でフィールドワークを実施する際には、学生の安全管理や引率態勢の綿密な検討が必要となる。この点は次年度以降の本格実施に向けての課題としたい。なお、多くの中等教育機関では、生徒指導上の問題を解消できなければフィールドワークの実施は現実的に困難であろう。既往の教育実践報

告において見過ごされがちな視点であるが、この点もまた重要な課題である。

- ③ 今井 (2023) によれば、高等学校において1単位時間(50分)でフィールドワークを実施する場合には、全行程を1,000mから1,500m程度に収めるとよい[7]。
- ④ 御菜肴八ヶ浦とは、収穫した鮮魚を幕府に献上する義務を負った漁業集落のことで、品川宿の北隣の品川浦と南隣の御林浦に加えて、本芝、金杉、羽田浦、生麦浦、神奈川浦、新宿浦などを指す[13]。
- ⑤ 実際、これまでもフィールドワークの実施を望む声は、同好会の学生以外からも複数寄せられている。